

Kappa Novels



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 ^{い けい}異 型 の 白 昼

昭和53年6月30日 初版1刷発行
昭和55年12月25日 15刷発行

定価680円

著 者 ^{もり}森 ^{むら}村 ^{せい}誠 ^{いち}一
発 行 者 小 林 武 彦
印 刷 者 盛 照 雄

東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発 行 所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替 東京 6-115347 電話 東京 (942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Seiiti Morimura 1978

(分)0-2-93(製)02346(出)2271 (0)

Printed in Japan

い けい はく ちゅう
異型の白昼

もり むら せい いち
森村誠一



カッパ・ノベルス

異型の白昼 目次

すれちがった凶器	5	交換した殺意	156	轢き逃げされた林床	258
変身した殺意	26	ペットの殉死	166	死者の同乗席	272
還元した指紋	58	色欲二人三脚	177	化け調師	283
職蟻の屈辱	69	空巢学入門	182	失楽の花園	294
かげの凶器	83	アレルギー性花盗	189	凶運をまねく傘	308
垂直の証拠	93	誤配された不倫	197	文学中毒症	319
禁断の囀繞	103	盗まれた声紋	211	埋め草の脚光	329
墜落した殺意	122	暗い夜明け	221	仮死石	340
犯行の営巢	132	派出された殺意	230		
主婦権争奪戦	140	お願い魔	249	あとがき	352

イラストレーション

安岡 旦

すれちがった凶器

1

ずしりとした重量が志木瑛子^{しきえいこ}の掌から移されたとき、
宮沢直人^{みやざわなおと}は、それが彼らの悪意の重さだとおもった。それはいかにも凶器と呼ぶにふさわしい重量だった。

「言うまでもないことだけど、うちへはもち帰らないほうがいいわよ。どんな拍子に家族に見られないともかぎらないから」

瑛子は周囲の耳目を気にしながら小声で言った。二人のほかにはだれもいるはずのないモーターの密室の中であったが、それでもなお盗み聴きされているような不安を拭いきれなかったのであろう。

「家族はいないよ」

宮沢は、口辺に皮肉っぽい笑いを刻んだ。

「だれかが訪ねて来るかもしれないじゃないの」

「訪ねる人がいるとすれば、きみ以外にない」

「本当かしら？ 私以外にも、休日や夜やって来て、食事の支度や下着の洗濯などしてくれる人がいるんじゃないの」

男の横顔を見つめる瑛子の目が緑色に光ったようである。

「そんな人がいれば、こんな危険な橋は渡らないさ」

宮沢は拗ねたように唇をゆがめて、煙草を啜^くえた。

「そうだったわね、つまらないことを言ってごめんなさい。あなたを見ているとたまらなくなっちゃうのよ。ああ早くいっしょに生活したいわ」

瑛子は、男が啜^くえた煙草に火を点^くけてやりながら、切なげにため息を吐いた。

「そんなにたまらなければ、どうして待っていてくれなかったんだ。だからいまになって、こんなリスクをかけなければならぬ」

宮沢は女が点けてくれた煙草の煙を苦そうに吐きだした。

「それはもう言わないって約束じゃないの。言ったってどうにもならないことでしょ」

瑛子は男が啜^くえていた煙草をついと抜き取って、自分

の唇に差し込んだ。

「この包み、開けていいかな」

宮沢はフリーになった口調で聞いた。

「いいわよ、よく確かめてちょうだい」

宮沢は瑛子から渡されたビニール布の包みを開いた。

ビニール布を取り除くと、さらに油紙で包んであった。

包装を完全に除いた後に、それは黒光りする凶悪な姿を現わした。

「父のアメリカ土産が、まさかこんな形で役に立つとはおもわなかったわ」

二人の視線の集まった先に、その物体は鈍く光る鋼鉄に鎧よろいわれた姿をじっと横たえている。静かなるときにも、そこに秘められた凶暴な殺傷力がひしひしと伝わってくるような、それ以外のいかなる形も考えられない凶器そのものの姿形がそこにあった。

「よく手入れが行きとどいているようだな」

「父が生きている間は、父が、私がもらってからは、私が、いつでも使えるように手入れだけはしておいたわ。でもまさかこういうことに使おうとはおもってもいなかったけど」

「本当に前科はないんだろな」

「大丈夫。その点は、絶対に信頼していいわ。父がアメリカへ行ったとき、ロスアンゼルスロサンゼルスの鉄砲店で新品新品を買ったのよ。護身用として買ったんだけど、その用途にも使ったことはないわ」

「よく持ち込めたもんだね」

「そのころは、ハイジャックなんかなかったし、税関の検査もゆるやかだったのよ。でもあなたのほうは、本当に大丈夫なの？ 銃銃の扱い方は知ってるの」

「きみこそ信頼してもらいたいな。これでもレインジャーレインジャーマークの持ち主だよ。人の殺し方はみっちり教わったさ。もっとも本当に殺すのは初めてだがね」

「頼むわよ、私たちがいっしょになるのは、それしか方法がないんだから」

「わかってる。ぼくだってできたらこんな手荒な真似はしたくない」

「わかっていたら、もうそんな恐こわいものはしまっただけで来て。計画がスタートしたら、当分逢えなくなるんでしょ」

瑛子は、ようやくこの場所にふさわしい甘え声を出した。

コルト45口径M1911A1、これが志木英子から託された凶器の名前である。銃器図鑑には、——コルト・ガバメントモデルとして知られる。ブローニングの特許による自動拳銃で、従来の38口径軍用拳銃の威力不足を増大するために、一九〇五年に45口径の原型を完成、その後改良が加えられて一九一一年に米軍に採用された。これがM1911で、さらに部分的な改良が加えられ、第二次大戦中、米、英、豪、中国連合軍に広く使用されてM1911A1となった。A1は第一回の改良型の意味である。現在でも米軍はじめ日本、韓国、比国などの軍隊で使用されている。民間用タイプもある——と解説されている。

もちろん宮沢にもなじみのある拳銃であった。英子から凶器を手渡されたとき、彼は、すでに後戻りのきかない軌道に乗って走りだしたのを悟った。

いや、おさななじみの英子に、再会したときからすでにその軌道へ乗っていたのかもしれない。

宮沢と英子は、幼稚園から高校までいっしょだった。

二人の家庭はどちらも中流のサラリーマンであった。両

家とも東京郊外に造成された初期の団地の同じ棟に住みついて以来十数年の隣人同士だった。移動の激しい団地の住人で、これは珍しいことであった。

事実、両家がこのへ入居してから、住人は何代も入れかわり、初代からずっと住んでいるのは、その棟で二軒だけになってしまった。

両家とも父親の会社が、東京にあって、地方支店がなかったせいもある。二人は幼稚園のころから手をつないで通った。

彼らの仲の良いのを見て、両家の親は、将来二人が結婚すると、婚家と実家が近すぎてサマにならないなどと笑っていたが、二人がしだいに成長してくると、それを冗談として笑えないほどにたがいを意識するようになった。

高校へ進学すると、周囲の友人たちも、彼らをカップルとして認めて、その間に介入して来なかった。二人は言葉に出して、はっきり約束したわけではなかったが、結婚の対象としてたがいをほのかに意識していた。

だが両家の「隣組」も、彼らが高校三年のときに終わった。英子の家が、土地を買い、そこに新たに家を建てて移っていったのである。

引越した後も、これまでどおり交際をしようと、両家は約束し合ったが、それは別離の感傷による言葉であった。

またそれまで両家の経済状態はほぼ同じだったのが、瑛子の家が移転する前後から、宮沢の父の会社が怪しくなった。企業の規模を縮小しての火の車経営になったのに反して、瑛子の父の会社ではヒット商品を次々に送り出して、羽振りがきわめてよくなっていた。同じころ瑛子の父親が重役入りした。

家を新築して、長年住みなれた団地から出たのも、「重役にふさわしい家に住みたい」という、妻の希望を入れたためである。

こうして、宮沢は「筒井筒」のパートナーを失った。

宮沢は大学の受験に失敗した。瑛子に去られたのが大きく影響していたことは否めない。宮沢の父は、浪人しても大学へ行けと言ってくれたが、父の会社もおもわしくなく、いつ倒産のうきめにあうかわからない状態だった。

宮沢はいろいろなハンディが重なったために、進学しようとする意志を失ってしまった。そんな時期にふと目にとまったのが、自衛官募集の案内である。身分は特別職国家公務員とあり、応募資格は十八〜二十五歳未満と

なっていた。衣食住無料のうえに月給、ボーナスも悪くない、いろいろな技術が学べる、各種国家免許が取れる、夜間大学への通学も奨励といういいことづくめの募集要項に心を動かされた。

このまま浪人して首尾よく大学へ入れたとしても、待っているのは、コンベアベルトに乗せられたサラリーマンのコースである。サラリーマン人生の退屈さと味気なさは、父親を見てよくわかっている。

生活の安定といういちおう魅力的な名分に惑わされて、自分の人生を売り渡してしまうことではないのか。そんなコースに、なにも父親のやせ細った脛すねをかじって乗るたがることはない。

自衛隊もサラリーマンにはちがいない。衣食住無料で、水準並みの月給をくれるのだから、「生活の安定」があることはまちがいない。だが、ここなら父親の脛をかじらなくとも入れる。そして憲法によって認められていない軍隊組織だけに、なにがあるかわからない未知数の楽しみと無気味さがある。

こうして宮沢は、陸上自衛隊へ入った。案の定、そこは彼にとってそれほど居心地の悪い場所ではなかった。女とプライバシーのない生活には閉口したが、それも馴

れば、さほど苦にならなかった。それに女は隊外で求めることができる。

なによりも気に入ったことは、規律と、命令に従ってさえいけば、優秀な隊員になれることであった。毎日何をすべきかは、細目に割りふられている日課によって定められている。自分で何をすべきか、考える必要はない。日課を消化する体力さえもっていれば、おもしろい煩うことはなにもない。要するに、哲学的思考や、人生の懷疑などは、最も遠い所にあった。

自衛隊という鑄型いがたの中に自分をまず、はめ込んでしまえば、あとは楽だった。

この期間に宮沢は、レインジャーコースを志願し、厳しい訓練に耐えてレインジャーマークを取得した。レインジャー教育は「隊員に対し困難な状況を克服して行なう潜入、襲撃、伏撃等の諸行動に関する能力および精神力を付与する」ことを目的にしている。

敵地潜入、偵察、破壊、爆破、闘技、山岳登攀はん、渡河、脱出、謀略工作等、およそゲリラ戦や挺身攻撃のためのあらゆる訓練をうけて、これに耐え抜いた者がダイヤモンドと月桂樹を組み合わせたレインジャーマークをあたえられる。これは自衛隊の中の最精鋭であることをしめ

す「お墨付き」である。

だが、レインジャー教育を了おえた後から、宮沢はまた娑婆の風が恋しくなった。たしかに隊は居心地いいし、ここで命令と規律に従っているかぎり、いちおうの所まで昇っていけるだろう。

だが、いまの状態で、日本が他国の直接侵略をうけるおそれは、まずない。政府の基盤防衛力構想にしても、「ここ十年は、日本に付する大規模な侵略の脅威はない」としている。いきおい自衛隊の役目は、「国力に応じて防衛努力を怠らず、自衛力を保持することで、戦争の発生を抑止する平和維持機能に重点を移す」という隊員にとってはなんとも曖昧なものになってしまい、教育訓練に重点がおかれるようになった。

憂国の情にあふれた精鋭の隊員にとって、自衛隊の役割はただ一つしかない。それは「勝つこと」である。それが防衛力の意味が曖昧で、隊員は、どこへ向けてよいかわからない、弾を撃てない銃をかかえて戦争ごっこのような訓練ばかりさせられている。

宮沢はそんな隊のあり方に、久しく離れていた娑婆が恋しくなったのである。規律と命令だけの生活にも飽きた。

こうして除隊した彼は、ガードマンの会社に就職した。ガードマンには、彼の経歴はもってこいであった。

そして会社から派遣された先で、瑛子と再会したのである。瑛子はある中所の電気機器会社の社長夫人になっていた。その会社に労働争議が発生し、支援団体をまじえて、連日のように労組員が社長の自宅に押しかけシュプレヒコールをかけるので、脅威をおぼえてガードマンを雇ったのである。

争議はその後、解決したが、再会した二人の仲は、これをきっかけにして再燃した。すでに二人とも性の何たるかを知ったおとなになっていただけに、燃焼は具体的に、肉体の奥を焦がした。

だが、瑛子は人妻だった。夫の志木義郎は、彼女の父親の会社の大手取引先である。会社主催の社員家族懇親パーティの席上で瑛子を見そめ、父にぜひにと望んで結婚したのである。

結婚のとき瑛子は義郎が好きでも嫌いでもなかった。まったくの無色透明に相手を眺めていたが、母親から、たがいに無色のほうがいい、いっしょに生活している間に自分の好きな色に染められるからねと言われて、大して抵抗もおぼえず嫁いで来た。

だが結婚して間もなく、瑛子は夫の正体を知った。義郎は精神が子供のまま、体だけおとなになったような人間だった。

良家の一人息子として生まれ、父が創始した企業を継ぐべき御曹司として過保護に育てられたために、三十近いのに、母親のコンプレックスから脱け切れない。

瑛子が始まりびっくりしたのは、新婚旅行先まで母親が尾いてきたことである。それでも瑛子自身が箱入りの世間知らずだったから、そんなものかとおもっていた。

だがそのうちに彼は夫としての位置にあぐらをかいて、ますますその異常性を表わしてきた。入浴中によく下着がなくなるので、それとなく注意していると、夫が盗んで身に着けてしまうことがわかった。

瑛子は、夫が時々その下着を身体に押しつけて手淫に耽っているのを目撃した。これは異物崇拜と呼ばれる性倒錯の一種で、爪や髪のような相手の体の一部だったものの、あるいは下着のように相手が身につけていたものを眺めたり、所有することによって性的興奮をおぼえるものである。フェティシズムは愛する対象、理想を捧げる相手に近づけない場合に起こりやすい「代用愛」あるいは「象徴愛」であるが、それが高じると、異物そのもの

だけが性目的の対象になる。

義郎には明らかにこの徴候があった。しかも、彼は全的に支配できる妻の体の部分や下着に対してフェティシズムに陥ったのである。それは彼のマザーコンプレックスの転化したものかもしれない。

だが、この種のフェティシズムは、夫が妻に対してそれほど憧れを捧げている証拠であり、愛の一変型ではある。

しかし、夫のフェティシズムは高ずる一方で、瑛子がとうてい容認できないような対象にまでエスカレートしてきた。

妻の下着や、その身体に密着していたものを盗んでいた義郎は、そのうちに、彼女の身体の一部だったものを蒐めるようになった。はじめのうちは、彼女の爪の切片や脱毛だった。次に彼女の入浴後に浴室へ入って抜け毛を拾い集めた。

まだこのあたりまでは、辛うじて容認できたのだが、義郎は、瑛子がトイレットへ入った後を狙うようになった。だれでも、自分の使った直後のトイレットへ入られたり、あるいは他人の出た直後へ入るのは嫌なものである。

それが義郎は、妻が使用した直後のトイレットで彼女が残していったかもしれないものを漁るのである。生理中の汚れた生理用品などは、彼の好餌となった。

これには瑛子も怒って激しく夫に抗議したが、まったく受けつけない。瑛子は義郎が家にいる間は、トイレットに行けなくなってしまった。

こんな時期に会社の労働争議が起きて、初恋の二人が再会したわけである。もともと争議が起きたのも、父から継いだ会社を私物化し、社員を自分の使用人と考える義郎の小児病的な性格にあった。

この争議によって、義郎は平取締におろされ、父の弟が社長に就任した。これを義郎は自分の器不足を棚に上げて、叔父に会社を奪われたと憤慨した。

社長の椅子からおろされたとき、義郎は母と手を取り合って泣いた。三十をすぎた大の男が母親の懷ろでさめざめと泣く姿は、異様な眺めだった。

愛が冷却したというより、もともと存在しなかったところへ、夫の異常が亢進し、初恋の相手と再会したことが決定的になった。瑛子は離婚を申し出た。義郎は激怒した。そして、自分の生きている間は、絶対に離婚に応じないと言った。

義郎のほうは、異常な形ではあったが、一方的に妻を愛していたのである。だからこそ妻の体の一部や、それと密接な関係にあった物質に対して異常なフェティシズムに陥ったのである。その妻を失うことは、崇拜の本体を失うことであつた。——自分が生きている間は、絶対に応じない——と宣言した夫に、瑛子は宮沢との新たな愛に絶望し、その絶望の奈落から、殺意がメラメラと暗い炎を噴き上げてきたのであつた。

3

「どうしても別れてくれなければ無理に別れる必要もないわね」

志木瑛子は自棄的に笑つた。

「どうしてもそんなことを言うんだ。志木が別れてくれなければ、ぼくたちはいっしょになれないじゃないか。あきらめてはいけないよ」

宮沢は励ました。

「だれがあきらめたなんて言つたの？」

瑛子がいたずらっぽく笑みを含んだ。

「しかしきみはいま……」

「べつに志木と別れなくとも、私たちがいっしょになれる方法はあるわよ」

「そんなことをすれば重婚だ」

「重婚なんかにならないわよ、志木が死んでくれれば」

「すぐに死ぬような病氣をもっていないだろう」

「病氣なんかなくても、人間はいくらでも死ねるわよ」

「きみ、まさか……」

宮沢が、瑛子の含みの底にあるものを悟って愕然とすると、

「なにを驚いているのよ、人間を殺す訓練はたっぷり受けているんでしょ」

「それは国を守るために……」

「国を守るのも、自分を衛^{まも}るのも同じことよ。だから“自衛隊”って言うんでしょ。義郎がいるかぎり、私たちの将来はないわ。それは、私たちの人生がないのと同じよ。

それにね、離婚しない利益^{ベリット}もあるのよ。私たちが夫婦のまま義郎が死んでくれれば、私、妻として相続権があるの。

志木家の財産は、凄いわよ。爺さんが死んで一人息子^{ヒコ}の義郎がその遺産をひとり占めしたから、もし義郎が死ねば、婆さんに三分の一、私に三分の二くるわよ」

「きみって女は」

「どう魅力的でしょ。財産は決して邪魔にならないわ。

義郎にお引き取りただいて、ほとぼりがさめてから、あなたといっしょになったら、それこそその財産で素晴らしい人生がおくれるっていうもんだわよ」

「そんなにうまくことが運ぶとおもってんのか」

「おもってるわよ。計画は私が立てるわ。実行はあなたが担当するの。とにかく被害者の妻と、殺しのプロが協力するんだから、役者は揃ってるわ。いいこと、これ以外に私たちの将来はないのよ。そのために私たちの全能力を振りしぼってみない？」

宮沢は、女の熱気というより「毒氣」に当てられた気がした。これが遠い日の青い初恋のパートナーと同一人物とは信じられないおもいがあった。だが、自分の幸せを得るためになりふりかまわぬ女の本質がそこにあるようでもある。そしてその幸せを共有することになるのは、宮沢である。彼は渦に引き込まれるように、瑛子の企みの中へ引きずり込まれていった。

一時の激しい燃焼の時間をすごしてから、宮沢と瑛子は、別々にホテルを出た。離婚を申し出たとき、義郎は瑛子に男ができたのだろうと詰った。だが、直感的にそう悟っただけで、証拠を押えたわけではない。

義郎と瑛子の夫婦生活は、いまや完全に形ばかりになっていた。フェティシズムが高じて、「異物」が崇拜の目的になっていたために、「本体」が忘れられていた。

だが、夫婦生活を体験して性にめざめた女が、夫の性倒錯のために置き去りにされてなんでもないはずがない。さぞや捌け口のない成熟をもてあましているにちがいない。フェティシズムに耽って、妻の実体を置き去りにしながらも、義郎の疑心だけは研ぎすまされていた。

その矢先に申し出られた離婚だけに、彼の疑心はいっそう募った。

そのため、瑛子と宮沢の関係は極秘に伏せられた。そのような事情がなくとも、ガードマンが依頼者の妻と通じたとあっては、会社の信用にもかかわる。

密行や諜報工作などは、レインジャー時代に叩き込まれていた。瑛子との秘密の逢いに、彼の前歴が役に立つとはおもわなかった。

宮沢は、たいていの尾行ならばまける自信があった。

危険なのは、瑛子のほうである。

ここで二人にとって幸運な偶然が起きた。

宮沢の警備会社は、調査を兼営している。企業関係の情報蒐集や、個人の私行、思想、行動の調査などもやる。

志木義郎は、ここへ今度は妻の行動調査を依頼してきた。そして、宮沢がその担当にされたのである。

まさか調査担当者と被調査者が通じていようとは、だれも知らないだろう。

こうして二人の関係は極秘のうちにつづけられた。義郎が別の私立探偵に二重に調査依頼を出しているのも、警戒は解かなかった。逢うほどに二人は離れ難くなり、義郎に向ける憎悪は募り、殺意は高まった。だがその殺意を実行するためには、二人の仲はどんなことがあっても隠し通さなければならなかった。

ホテルも毎回変え、別々に到着して、別々に出て行った。部屋も二つ取り、ホテルの中で合流した。この手を使えば、現場を押えられないかぎり、ホテル側にも関係性を悟られない。

逢うつどに、義郎に対する殺意は固まり、計画が練られた。

英子が父から「護身用」にもらっておいたピストルが計画に具体性を帯びさせた。宮沢は銃器の取り扱いに馴れている。自衛隊の隊内対抗の射撃競技大会で全国二位の腕の持ち主で、自信があった。

あとは、いつどこで決行するかという問題を残すだけ

となった。

「射つのは易しいわ。あなたが捕まらないように射たなければなんにもならないのよ」

英子が言った。

「だから志木の一週間をよく観察しておしえてくれ。必ず隙があるはずだ」

宮沢は、志木が独りになるときを狙っていた。それも銃声が周囲に聞かれないような場所で独りになるのが理想的である。独りで磯釣りや山登りでもしてくれれば、まさにおもうつぼだが、あいにく、義郎には釣りや山の趣味がない。

ゴルフへはよく行くが、必ず連れがいる。ともかく機会をじっと待つ間、凶器だけ宮沢が預かっておくことにした。チャンスがめぐってきた場合、いつでも行動をおこせるようにしておくためである。

「絶対に家においてはだめよ」

ホテルを出てから、英子が念を押した言葉がよみがえった。

「やはり、コインロッカーが無難だろうな」

駅のコインロッカーなら使用開始日から三、四日間は何れにも覗かれない。三、四日たっても荷物を取りに来

